

氏 名 新明 英仁

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 172 号

学位授与の日付 平成 19 年 9 月 28 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 「アイヌ風俗画」の研究—近世北海道におけるアイヌと美術

論文審査委員	主査	教授	松山 利夫
		教授	佐々木 史郎
		教授	吉田 憲司
		教授	佐々木 利和
		教授	大塚 和義（大阪学院大学）

論文内容の要旨

アイヌは文字や絵画を描く習俗を持たないため、日本列島に住むアイヌ以外の人々（和人）が描いた絵画が近世以前のアイヌ民族文化研究における重要な資料とされてきた。

本研究の第1の目的は、近世の蝦夷地に住むアイヌの風俗を描いたこれらの絵画を「アイヌ風俗画」と呼称して「風俗画」の一分野としてとらえ、美術史上の意義と絵画作品としての魅力を考察し、とりわけ十分な検討が行われていない明治以前における北海道の美術の系譜と展開を明らかにすることである。第2の目的は、「アイヌ風俗画」の各作家の性格とその活動年代、作品の画題、技巧の巧拙、描写の正確さなどを比較検討し明らかにすることである。これにより、これらの絵画が資料批判を十分に行わずにアイヌ民族文化研究のうえで取り上げられている現状への注意を喚起することにもつながるものとなる。

筆者の言う「アイヌ風俗画」は、「アイヌ絵」とも呼ばれ、少なくとも日本近世美術史の中で認知されたものとは言い難い。従って、第1章の序論において、その定義や呼称および作家の問題を過去の研究をふまえながら明らかにする検証を行った。その結果、定義は、作家の時代を、江戸時代中期から明治時代初期に限定し、アイヌに接触のあった和人が描いた版本を含まないオリジナル作品を基本とすることとした。また、それらの絵画の呼称は、先学の認識や辞書的な意味、筆者の目的をふまえて、「アイヌ風俗画」を用いることとした。また、「アイヌ風俗画」の作家は、その活動内容がこれまでの研究で十分に吟味されてこなかった。模写が多いことや作品の散逸など研究を困難にしている事情があるが、本稿では美術の立場からそれを検証するため、アイヌの風俗に接する機会が多く、それを表現するのに十分かつ安定した絵画技術をもち、アイヌの顔立ちや身体表現について独自の様式を持つ人物に限定した。すなわち、最初に確認できる作家として重要な小玉貞良、最後を飾る作家として重要な平澤屏山、詳細な記録画をのこした村上島之允、それに朗郷、谷元旦、村上貞助、松浦武四郎、雪好、千島春里、早坂文嶺を加えた10人である。これらの作家は「アイヌ風俗画」制作の動機や契機によって「在住型」と「訪問型」の2類型に分類できる。すなわち、蝦夷地に在住もしくは長期滞在して「アイヌ風俗画」を受注制作した「在住型」作家として小玉貞良、雪好、千島春里、早坂文嶺、平澤屏山の5人、幕命による調査や探検に基づいて制作した「訪問型」作家として谷元旦、村上島之允、朗郷、村上貞助、松浦武四郎の5人となる。

第2章は、「在住型」作家5人の経歴と主要作品についてそれぞれ述べ、彼らが全員一般からの注文に応えた町絵師であり、町人階級であることや、需要に応じて粉本パターンを用いるという性格を明らかにした。

第3章は、第7章で村上島之允と同一人物であることを立証する朗郷を除く「訪問型」作家4人の経歴と主要作品について述べ、彼らが全員武家で、蝦夷地を訪れた主要な理由は幕命であり、アイヌの文化に一定の見識を持ち、江戸時代に広がった経験主義的、実証主義的立場からそれを客観的に紹介するという考え方を持っていたことを明らかにした。

第4章は、「アイヌ風俗画」の各作家ごとにアイヌの人物像の特色を詳細に述べるとともに、各作家が取り上げた風俗・画題の傾向と特色、並びに相互の影響関係について述べた。アイヌの人物像に関しては、最初に1700年代以前の絵画における伝聞や想像の入

り交じった例などを述べ、その後小玉貞良以降の実際にアイヌと接触のあった作家の「アイヌ風俗画」における特色を「在住型」「訪問型」の順に検証した。これにより、1700年代以前と以後のアイヌ像のもつ現実感の差違が大きいことや、「アイヌ風俗画」各作家の個性によるアイヌ像の違いが明瞭となった。また、画題の面では「在住型」作家は祭祀、生業、和人との儀礼に偏り、「訪問型」作家ではそれに加えて神話・伝説、アイヌ個人の肖像、人生儀礼などを含む幅広いテーマが扱われている点を指摘した。

第5章は、前章をふまえて、「アイヌ風俗画」に取り上げられた画題を、神話・伝説、信仰と祭祀、人生儀礼、挨拶及び和人との儀礼、多彩ななりわい、踊りと芸能の6項目に大別して詳細に検討した。それにより、次の3点の注目すべき事実が明らかとなった。

第1は、「在住型」作家が商業的、政治的意図を持つ発注者や勇壮さとエキゾチックな主題を求める一般的嗜好を反映した作品を制作したのに対し、「訪問型」作家はおもに幕命に従い、江戸時代の実証的学問を背景として、その風俗全般を写實的に記録する意図を持って作品を制作したことである。

第2は、こうした両者のスタンスの違いが作品の表現内容や制作方法に影響を与えていることである。「在住型」作家は、見る者が楽しめるように、作品の構成や人物の表情・所作に工夫を凝らしており、一般に好まれる傾向の作品を量産するために粉本を活用した例が多い。一方の「訪問型」作家は、当時の知識階級の要求に応えるドキュメントとしての内容が大切にされて、実見した内容による簡潔明瞭な写生による作品が多い。

第3は、「在住型」「訪問型」それぞれの中心をなす作家が明瞭になったことである。「在住型」の中心は平澤屏山であり、主題と表現内容が最も創意に富む。「訪問型」の中心作家は村上島之允であり、主題はアイヌ風俗全般に及び、ドキュメント絵画としての価値と魅力を持つのみならず、他の「アイヌ風俗画」の作家に広く影響を与えている。

第6章は、さらに検討を要する3人の「アイヌ風俗画」の作家と作品について考察した。第1に取り上げたのは最も現存作品数の多い平澤屏山で、作品量産の背景や「在住型」のアイヌ風俗絵師としての典型的な特色や限界を結論的にまとめた。

第2は、谷元旦の「毛夷武餘島図」が、江戸時代の武家における実証主義、経験主義を背景に、アイヌの風俗と蝦夷地の実景を組み合わせ描いたものであり、「アイヌ風俗画」と「真景図」の要素を併せ持つことを立証した。

第3は、村上島之允の代表作『蝦夷島奇観』と朗郷の3点の作品における人物表現を詳細に比較検討し、さらに朗郷の関係人物も合わせて考証した上で、両者が同一作家であることを立証した。これにより、村上島之允の作風が一層明らかになった。

最終章の第7章では、「在住型」「訪問型」の特色をまとめ、「アイヌ風俗画」の系譜と日本近世美術史における位置づけの検討を行った。「アイヌ風俗画」の系譜は、縦軸として最初期の小玉貞良から千島春里を経て平澤屏山に至る歴史的な展開があり、これに横軸として村上島之允が交差するものである。日本近世美術史の中で「アイヌ風俗画」は、アイヌ風俗というローカルな異文化を扱った点で特異なものであり、作家のオリジナリティが高く、アイヌ風俗を描写するために作家たちが培ったナイーブな表現には見るべきものがある。従って、近世風俗画において独自の位置づけを主張することができる。

論文の審査結果の要旨

論文審査は平成19年7月3日に審査員全員出席のうえ実施した。審査結果はつぎのとおりである。

本論文は、従来、作家ごとに論じられてきたいわゆる「アイヌ絵」を「アイヌ風俗画」として再定義し、それらの作家をその来歴や作風、制作目的を指標に「在住型」と「訪問型」に分類してそれぞれの特徴を明確にするなど、著者のオリジナリティにもとづいた労作である。

まず第1章では「序論」として、この論文の目的と意義につづいて「アイヌ風俗画」をめぐる先行研究をリファアーするとともに、「アイヌ風俗画」を次のように定義する。まず、地域的には北海道に居住したアイヌを対象にし、時期的には18世紀前半から19世紀末までの一連の作品で、それにはアイヌが登場し、その装束や風俗、あるいは何らかの所作が描かれているものであるとする。そのうえで本論が主要な分析の対象とする作家を、アイヌと直接に接触し、その描写に安定した絵画技術が認められ、かつ素性氏名の明らかな10人に限定し、これを「在住型」と「訪問型」に区分する。つづく第2章と第3章では蝦夷地に在住するかもしくは長期間にわたって滞在した「在住型」の作家と、幕命による調査や探検などにもとづいて蝦夷地を訪れた「訪問型」作家のそれぞれに関する一群の資料が、280をこえる多数の図版によって提示される。

また、第4章と第5章では、これらふたつのタイプに属する作家ごとに、その人物像や画題をまず分析する。ついで町絵師の性格を強くもった「在住型」の作家が、制作を発注した商人や外国人などの意向を積極的に取り入れてエキゾチックな主題に重点をおいたことを論証する。これに対して、幕命を拝するなどして蝦夷地の実情把握を意図したとみられる「訪問型」の作家では、当時の上流階級がもった博物学的な知識を背景に写実的な作品群を残したことを実証する。この第4章と第5章の2つの章は本論の中核をなす部分であり、うえに述べたようなこれまでの「アイヌ風俗画」研究にはみられなかった刺激的で独創的な論が展開される。

これにつづく第6章では、作家・作品論を展開するなかで、作品における人物表現や交友関係などの詳細な調査を手がかりに、「訪問型」の作家である村上島之允と朗郷は同一人物であることを論証する。これは本論が到達した大きな発見である。

最後の第7章では、「アイヌ風俗画」は、闊達な大衆性をもつ「在住型」と正確な記録性をもつ「訪問型」の2つのタイプが並立し関連し合って展開したとする。さらに、日本の近世においてそれが異文化を扱っているところに、当時の日本美術における「アイヌ風俗画」のオリジナリティとリアリティを認め、日本近世美術史におけるその特筆すべき地位を明らかにする。

こうして本論は、「アイヌ風俗画」研究の現状における全体像を提示したうえで、従来なかった新しい視点から分析を試みた。しかし、その斬新さのゆえになお若干の問題が残されている。たとえば民族誌資料として「アイヌ風俗画」を利用する場合の有効性と限界性が、「在住型」と「訪問型」作家の作品の間でどの程度の差異をもつのかなどについて

の、より精細な議論が望まれることなどである。しかし、このことは本論文の価値をそこなうものではなく、審査委員会は本論文のオリジナリティを高く評価し、学位に値するものと判断した。

また同日（平成19年7月3日）に口述試験を実施し、学位授与に値する学力を有していることを確認した。